

肥後和男宮座論の再検討

市川秀之

Rexamination of *Miya-za* Theory of Kazuo Higo
ICHIKAWA Hideyuki

はじめに

- ① 肥後史学の中の宮座研究
- ② 肥後の宮座研究の道程
- ③ 肥後はなにを「宮座」としたのか
- ④ 「村座」の意味
- ⑤ まとめ—民俗学にとつての「宮座」の意味

【論文要旨】

肥後和男は「近江に於ける宮座の研究」「宮座の研究」の二書において宮座研究の基礎を築いた人物として知られる。同時に水戸学や古代史・古代神話などの研究者でもあり、肥後の宮座論はその研究全体のなかで位置づける必要があるが、これまでそのような視点から肥後の宮座論を評価した研究はない。肥後が宮座論を開始したのは、宮座の儀礼のなかに古代神話に通じるものを感じたからであり、昭和一〇年前後に大規模な宮座研究を開始したのちも肥後のそのような関心は衰えることはなかった。肥後の宮座に対する定義は数年におよぶ調査のなかで揺れ動いていく。調査には学生を動員したため彼らに宮座とはなにかを理解させる必要があったし、また被調査者である神官や地方役人にとつても宮座はまだまだ未知の言葉であったため、その明確化が求められたのである。肥後の宮座論の最大の特徴は、村落のすべての家が加入するいわゆる村座を宮座の範疇に含めたことにあるが、この点が宮座の概念をあいまいにする

一方で、いわば宮座イコールムラ、あるいは宮座はムラを象徴する存在とされるなどの研究にも大きな影響を与えてきた。現在の宮座研究もなおその桎梏から逃れているとは言い難い。肥後が宮座研究に熱中した昭和一〇年前後は、彼が幼少期から親しんできた水戸学に由来する祭政一致がその時代を主導する政治的イデオロギーとしてもはやされており、神話研究において官憲の圧力を受けていた肥後の宮座論もやはりその制約のなかにあった。すなわち祭政一致の国家を下支える存在としての村落の組織としての宮座は、全戸参加すべきものであり、それゆえ村座は宮座の範疇に含まれなければならないのである。肥後の宮座研究は昭和一〇年代という時代のなかで生産されたものであり、時代の制約を受けたものとして読まなければならない。宮座の定義についてもそのような視点で再検討が是非必要であろう。

【キーワード】宮座、村座、古代神話、祭政一致